

ぶっきょうつうしん 仏教通信 「うらぼんえ 盂蘭盆会について」 7月

「お盆」の正式名称は「盂蘭盆会」といいます。「盂蘭盆会」とは、インドのサンスクリット語の「ウランバナ」を、漢字に音写したもので、その意味は「逆さ吊りの苦しみ」というものです。言い伝えによると、お釈迦さまの弟子のモッガラナ（目連）が、亡くなった自分の母親が、どの世界に生まれかわったのかを神通力によって見たところ、自分の母親が吝嗇（他人に物を分け与えないこと）の罪で餓鬼の世界に落ち、ウランバナの苦しみにあっていた事が分かりました。モッガラナは、すぐに餓鬼の世界にむかい、鉢にご飯を盛って母に捧げましたが、餓鬼になった母がそれを食べようとすると、たちまちそのご飯は火炎となって燃え上がり、水を飲ませようとしても、水までも炎となり、飲食をすることがどうしてもできません。

モッガラナは、どうしたら母親を救えるのかを、お釈迦さまに相談したところ、お釈迦さまは「お前の母は、息子のお前には優しい人であったが、お前以外の人には冷たい利己的な人であった。だからモッガラナよ、お前が母親の代わりに他の人に尽くす利他のおこないをきなさい。」とこたえました。それを聞いたモッガラナは安居（雨季の修行）が終わった僧侶たちに、自分の持っているもの全てを捧げ、お世話をしました。そのモッガラナのおこないにより、母親を餓鬼道から救うことができたと伝えられています。そのお供え物をした日が7月15日と伝えられているため、その日は、今は亡き祖先に膳を盛って、お供えをする仏教行事として行われるようになりました。

親鸞聖人の教えを受け継ぐ浄土真宗では、いのちあるもの全て阿弥陀如来が極楽浄土へ救ってくれるという教えです。そこから、「お盆」は亡くなった人や先祖の霊を供養することを目的にするのではなく、亡き祖先から「わたし」に受け継がれた「いのちの連なり」に感謝し、手を合わせる日が「お盆」の意義であると考えています。合掌



今年の盂蘭盆会は7月16日(火)に行い、『仏説阿弥陀経』を読経します。